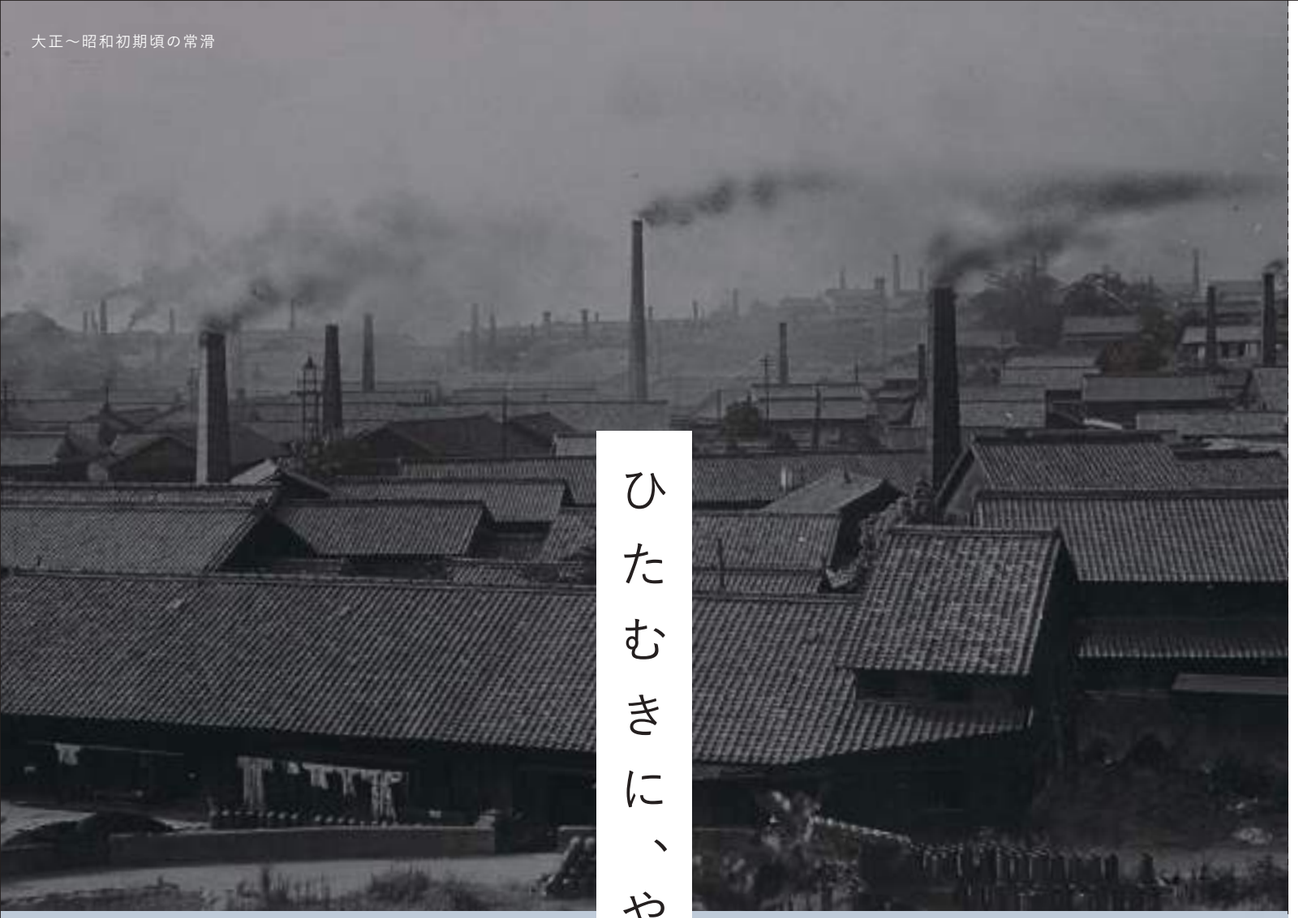
陶研

2024
常滑｜愛知

とこなめ陶の森 陶芸研究所

第42期

研修生募集


大正～昭和初期頃の常滑

ひたむきに、やきもの、常滑

現在の常滑

とこなめ陶の森 陶芸研究所（陶研）と研修制度

陶芸研究所は、「古常滑」に代表される中世以来の伝統と芸術性が、
現代陶芸にも活きていることを広く社会に発信する目的で
昭和36年（1961）に開所しました。
その後、昭和58年（1983）から研修生への技術指導を開始し、
これまでに171名の研修生が巣立ちました。

建学の精神

常滑の陶業陶芸振興へ多大な功績を残し、陶研の設立に尽力された 故 伊奈長三郎氏は、
“陶業の振興は、陶芸が土台になる。陶芸における美と技の目的は、陶業につながる。”
（『巧と業の協奏 INAXと常滑焼のあゆみ』より）と述べており、
陶研の建学の精神となっています。

常滑陶業界の偉人、伊奈長三郎

伊奈製陶㈱（後の㈱INAX、現㈱LIXIL）の創業者で、初代常滑市長も務めた常滑市名誉市民です。陶管やタイル、衛生陶器などの建築用陶器の一貫生産体制の確立など、常滑陶業界に多大な功績を残しました。さらに、陶芸研究所の設立資金として、常滑市へ自社株を寄付するなど、常滑の陶芸振興にも貢献されました。

研修制度の目的

やきものづくりを
生業（なりわい）とする人材を育てる

基本方針

「常滑の“まち”とともにつくり手を育てる」
「自主性と探求心を持ったつくり手を育てる」
「基礎を身に付け、プロセスを大切にするつくり手を育てる」

陶芸研究所職員からのメッセージ

やきものをゼロからはじめる方でも、密度の濃い2年間の研修を通して、
自らの意欲次第でやきもののつくり手として巣立つことができる、そんな場所でありたい。
私たち陶芸研究所の職員はそう考え、研修生を毎年受け入れています。
常滑の地は、約1000年前からやきものをつくり続けている産地であり、
先人から脈々と受け継がれた技術や哲学を引き継ぐつくり手が日々、作陶に励んでいます。
その技術は、薪窯・大物・急須ロクロなど多様で、それらを研修で学ぶことができます。
常滑でやきものを学ぶにあたり大切なことは、先人が伝える技術や哲学を自らの糧として探求し、
自らの作陶人生を切り拓いていくことです。
私たちは、現役のつくり手として活躍している講師や産地関係者とともに、
あなたの意欲に応えていきたいと考えています。

2年間の研修の流れ　入所前～1年次

※ 研修内容は、変更する場合があります。

土づくり
様々な原土を用いて、土それぞれの個性を知り
土づくりから生まれる風合いの違いを
基礎から学べます

手びねり
思い描く形に粘土を
積み上げる技術を学びながら、
自分らしい表現を模索します

タタラ
粘土を板状にした
タタラを扱う技術を学びます

ロクロ応用
ロクロ基礎から
より複雑な形や、
より大きなものに挑戦します

入所

入所前　試験

- **自由見学**
  見学は、いつでも受け付けています
- **相談窓口**
  TEL・Mailでの相談も可能です
- **住まいの相談**

デッサン
観察力を鍛え、
自分らしい物の見方や表現を見つけます

1年次

当施設では、経験がない人も受け入れており、
1年次はやきものづくりの基礎を学ぶことを重視し、
その経験を通して生業とする意識を高めていきます。
※ 経験者にも、レベルに合わせた学びのある研修を行っています。

ロクロ基礎
電動ロクロを使った
粘土の成型技術を
学びます

1. 自ら学ぶ姿勢を尊重し、その中での気づきを大切にします。
2. やきものづくりの各プロセスを理解し、基本が身につくまで繰り返し練習します。
3. 素材について理解を深めます。
4. 炎を使った焼成技術をしっかり習得します。

インターンシップ
つくり手の現場や仕事を体験し、
自らが活動するための気づきを得ます

装飾（化粧技法）
化粧土を用いた
装飾技法を学びます

鋳込（いこ）み
泥状の粘土を型に流し込む、
鋳込み技法の基礎を学びます

日程・時間

研 修 日　毎週 火曜日～土曜日（年間約240日）
研修時間　午前8：30～午後5：00（昼休み1時間）
※ 窯焚きで深夜になることもあります。 ※ 研修時間は、変更する場合があります。

陶研の特長

- 講師は現役の職人・作家です。
- 1学年定員5名という少人数制で、個々に合わせて指導します。
- 多種多様な土や原料を使います。
- ガス窯焼成を中心に、窯焚きは自由に行うことができます。
  また、薪窯（穴窯）による実習も行います。
- 研修や講義のない日曜・祝日も施設を利用できます。

陶研の主な設備

焼成設備
- 薪窯（穴窯）
- ミニ薪窯
- 電気窯（26.5kw ／ 12kw×2基／ 7kw）
- ガス窯（1.0㎥／ 0.7㎥／ 0.2㎥）

機械設備
- 施釉ブース
- ポットミル
- ロクロ（15台）
- 土練機（4台）
- フィルタープレス
- ベルダー
- バ フ

※ 研修室には冷暖房設備があります。

2年間の研修の流れ

2年次～修了後の支援

常滑独自に発展した
卓越した急須づくりは
注目を集めています

急須ロクロ
急須産地で常滑独自に発展した、
精度の高いロクロによる急須づくりを学びます

情報発信力
作品・作者の紹介方法や、
その発信の仕方を学びます

修了制作
修了後の活動につなげるために、
各研修生が自主性を持って取り組む
研究制作です

中古道具の紹介
産地に眠る空き家・工房・中古道具の情報を、
使いたい方へ提供します

2年次

1年次に学んだやきものづくりの基礎を活かし、
自主性を持って、進む方向性を
より明確にしていきます。

1. 研修生の自主性を尊重し、自由な時間を多く取り入れます。
2. これまでの研修を通して、自ら進む方向性を明確にしていきます。
3. “まち”や“人”とのつながりを研修の中に取り入れ、修了後の活動へ結びつけます。

修了

修了後の支援

修了生に対し、常滑で活動するための様々な支援を行っています。

- 工房家賃を補助（3年間）
- 空き家・工房・中古道具の紹介
- スキルアップ教室、オープン講座の開催
- 研修工房の窯や設備の使用（有料・要予約）

絵付け
絵をほどこすための
基本的な技術を学びます

修了展
作品展示を通して、
社会に繋がる第一歩となる発表の場です

スキルアップ教室
プロとして活動しているつくり手に向けて、
技術向上を目的に開催しています

1年次・2年次 共通項目

探求と表現
各自がやきもので表現したいことを
見つけるための授業です

ガス窯・電気窯焼成
それぞれの窯の特徴をつかみ
作品にあった焼成技術を学びます

薪窯焼成
1200℃を越える炎を操る薪窯体験を通して、
やきものづくりの原点に触れます

窯の焼成は、自主的に計画をたてられます。

釉薬講義
望む釉薬が作れるように、
原料や作り方を学びます

茶華道
やきものを取り巻く文化を学び、
使う目線からの気づきを得ます

フィールドワーク
県内外のやきもの工房や
関係施設を視察し交流を深めます

イベント参加
市民向けのワークショップ
などを体験します

その他、「陶磁史・陶芸概論」や「講演会」、「デモンストレーション」を行います。

土に癒やされ、生かされる日々。

陶芸作家
加藤 真美さん
愛知県東海市出身
陶研 第2期生（1986年修了）

惑星 ープラネットー（2022年）

月下（2022年）

やきものとの関わりは、病気で体調を崩しがちだった学生時代がきっかけなのかもしれない。学業を続けられない私に、父が陶研を紹介してくれたのがはじまりです。
当時、陶研への入所に戸惑いながらも陶芸について基礎から学んだけれど、土の「やさしさ・寛容さ」までは全く理解が及んでいませんでした。

陶研修了後は、陶芸家のもとで2年半内弟子として働き、その後独立。広く家庭で望まれる使いやすい器をつくっていました。私の器は丈夫で使いやすいと評価をいただくこともあって、何の疑いもなく作陶生活を営んでいました。そんな中バブルが崩壊し、やきもの屋を取り巻く状況が一変しました。取り扱いギャラリーやショップが次々閉めてゆき、やきもので生計を立ててゆくことができなくなりました。
そんな失意の中、ある作家に「うつわは所詮うつわでしかないけれど、私のはアートだから」と言われ衝撃を受けました。「うつわ」という言葉でまず対象をカテゴライズしてしまい、即ちアートになり得ない、とする見解には納得できませんでした。そうではない、と私は自分に証明しなくてはなりません。

少なからず傷つき悲しい想いでつくっていると、何となく私なりに気持ちを込められた、と思うものができるようになりました。それはやはりうつわの形をしていました。曲面で包まれる豊かな内的空間をかたちづくっていると、徐々に慰められ、認めたくない自分に相対し受け入れ許せるようになっていったのです。自分にもできた。綺麗だと思う。これが誰にも伝わらないのであれば、やきものをやらなくてもいいと思いました。

そこで、恐る恐る長三賞陶芸展に応募してみたのです。その時審査員をしていらした鯉江良二さんが、「目立たない、地味な作品だけど僕には音楽が聴こえる」と、審査員賞に選んでくださいました。その言葉を伺って、全ての人にはわかって貰えないかもしれない、だがそういうアンテナを待っている人にはちゃんと感じてもらえるんだと感激し、大いに自信になりました。

つくっていく過程で、いろんなその先の形が浮かんできて、次の作品への意欲が湧いてくる。次はこうしようと思ったり、または土をいじっている途中にどんどん新しい形が見えてくる。勢いあまって、想定していたものから大きく逸れてしまうことも。

土はいつも、私の好きにさせてくれる。どう手を動かしても受け入れてくれる。無理にやれば壊れるけれど、特に磁器なんかは乾いてからでも盛ったり削ったりできるし、いつまでもいじらせてくれる。土は、やさしいね。最後は窯の中で焼かれて死んでくれる。もう、そうしたら土には戻れない。砕いて何千年もしない限りは。

あぁ、土に、やきものに出会えて良かったと感じる。

家族で技法を守り新しい価値を育む。

憲児陶苑
堀田 拓見さん
愛知県常滑市出身
陶研 第30期生（2014年修了）

堀田 之江さん
東京都足立区出身
陶研 第28期生（2012年修了）

父の後を継ぎ、家業を営むとは思ってもいませんでした。20歳から6年間一般企業で働き、退職を機に父から「手伝わないか」といわれたのが、やきものに携わるきっかけです。それまでは、窯元に生まれながら陶芸に関する知識はほとんどなかったので、陶研に入所することにしました。同期の中でまったくの素人は私だけという状態でしたね。同期の研修生は個性的な人がそろっていたんですが、中でも私は穏やかだったらしく、「クッション役」や「まとめ役」という存在でした。

祖父の代からはじまった家業は、昭和の家の土間や庭先でよく目にした「タイルの流し台」を製造・販売するところからはじまったと聞いています。父の代には、当時常滑で盛んだった手挽きの練り込み湯呑みや急須をつくるようになりました。多色の土でつくる練り込みのやきものは独特で、黄土に朱や緑の土を層にして、色が混ざりきらないように練ってつくります。その土で水挽きをして形をつくり、表面に水玉カットを施すことで、混ざりきらない土色が地層のように現れてきます。この技法によって「憲児陶苑」を象徴する風合いが生まれました。

今は、4色の土、7色の化粧土に彫りを用いていろいろな器を生み出せるようになりました。うちの製品のほとんどは、先代から繋がりのある常滑市内の問屋さんや商店さんに向けて出荷され販売されます。私の代からはじめた明るめの化粧土を使った茶器は、雑誌記事やSNSをつたって広くみなさんの目に留まるようになったんです。そうして今では東京・大阪・静岡などからも注文をいただけるようになりました。これまで古風で渋い印象だった茶器に、白土を用い、鮮やかな化粧土と水玉カットを施したことで、現代の家庭になじみやすくなったんだと思います。

水玉カットを応用した一輪挿しとカップ

練りこみ・水玉カットの急須

私たちのような窯元の役割は、持ち味を活かしてみなさんの要望に応えることだと思っています。商店さんからは、ロングセラー製品の注文はもちろん、特注品の相談もいただきます。特注品は手挽きならではの自由度の高さやサンプルづくりの身軽さ、手挽きでも均一で個数を揃えられるという技能が活きていると思います。

憲児陶苑は家族や親族の3〜4人で運営していて、注文の数に応じて仕事量を決めていきます。妻が土の調合と練り（水分調整）、水挽きを主に担当。私は、乾燥の管理、化粧土掛け、彫り、仕上げ、焼成、納品。母や妹が出荷前の品質検査といった具合です。特注品のサンプルは、夫婦で話し合いながら私が手挽きから彫りまで仕上げます。家族で窯元を営んでいく利点は、お互いに家事や子育て、納品時間などの調整がしやすい点ですね。仕事はだいたい9時前〜17時で、注文が多いときには残業もしますが、妻が家事に取りかかりやすいように工程の役割を分担しています。

常滑は窯業で栄えた町。先代から引き継がれた私たちのような窯元職人もいれば、陶芸作家として生きる方も大勢いらっしゃいます。やきものに対して懐が深い町の雰囲気や風土は日々のモチベーションを高めてくれます。

第42期生 募集要項

研修期間
2年（令和6年4月～令和8年3月）

募集人数
5名

研修費
月額2万円
※ 各自購入する道具等は別途実費負担となります。

応募資格
以下の（1）～（4）の全てに該当する人
（1）満40歳未満の人（昭和59年4月2日以降に生まれた人）
（2）大学・高等学校卒業及び卒業見込みの人
　または高等学校卒業と同程度の知識及び技能があると認められる人
（3）心身ともに健康で 、研修期間を通じ熱意をもって研修に専念できる人
（4）研修修了後、引き続き陶業陶芸を仕事として継続する意思のある人
※外国籍の人は、日本語能力試験N2相当の能力を有していること。

応募受付期間
一次募集受付　令和5年11月1日㈬～ 11月30日㈭
二次募集受付　令和6年1月11日㈭～ 1月31日㈬
※一次で合格者が定員に達した場合は、二次募集を行いません。
　二次募集の有無は、ホームページにてお知らせします。

応募書類
1. 履歴書（市販A4サイズ／ 6か月以内撮影の顔写真添付）
2. 作文　テーマ：『陶芸研究所で取り組みたいこと』（800字程度・任意様式）
3. 日本語能力認定書（外国籍の人）

応募方法
以下の受付場所へ応募書類を持参または郵送

受付場所　〒479-0822 愛知県常滑市奥条7丁目22番地
とこなめ陶の森 陶芸研究所

持参の場合　受付時間　午前9：00～午後5：00
※ 休館日は毎週月曜日（祝日の場合は翌日）です。

郵送の場合　『特定記録郵便』の扱いにすること
※宛名面に「研修生応募書類在中」と朱書きしてください。

試験日程
一次募集の試験日　令和5年12月17日㈰
二次募集の試験日　令和6年2月4日㈰
※一次で合格者が定員に達した場合は、二次募集を行いません。

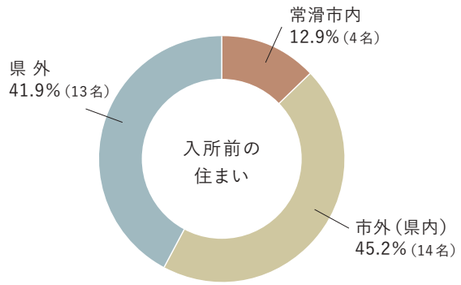
試験内容
●適性検査（60分）　●実技試験（90分）　●面 接

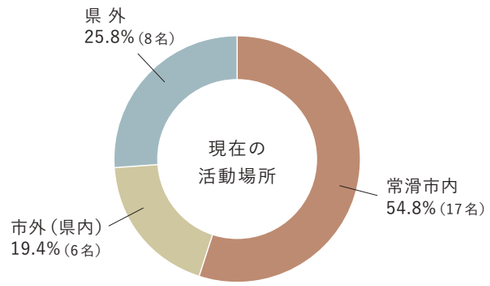
試験当日の持ち物
●受験票（応募受付後、郵送します）　●筆記用具
●タオル2枚、作業着　●昼 食　●自身の作品写真（ある人のみ）

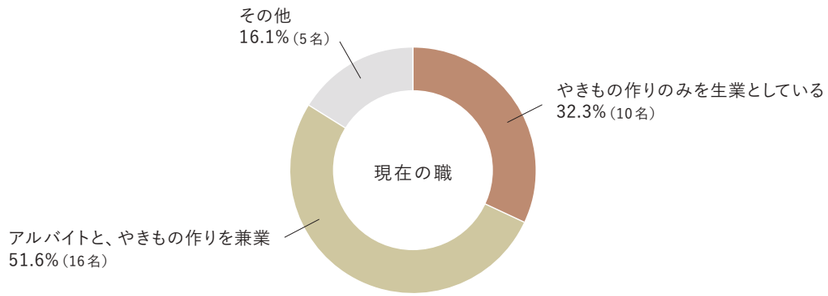
合格発表
ホームページにて合格者の受験番号を公開したのち、
受験者全員に郵送で結果を通知
http://www.tokoname-tounomori.jp/
※入所手続については、結果とともに合格者に通知します。

研修修了後の活動状況（令和5年6月時点）

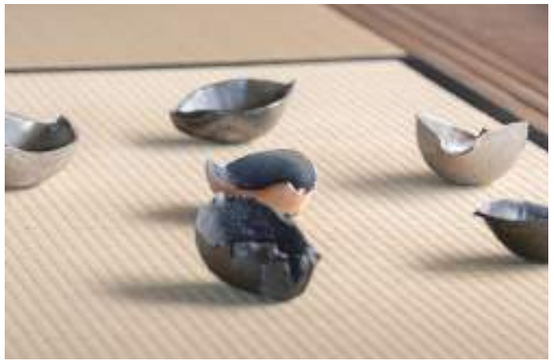
2年間の研修制度を開始した平成24年度（30期生）～令和3年度（39期生）の10年間に修了した、計31名の活動状況





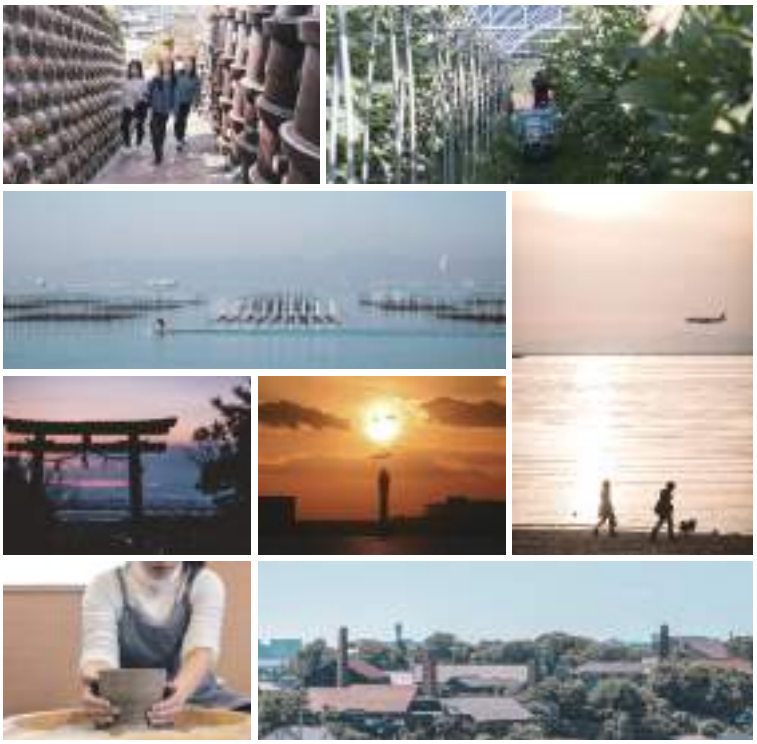


第39期生 修了展作品（一部）

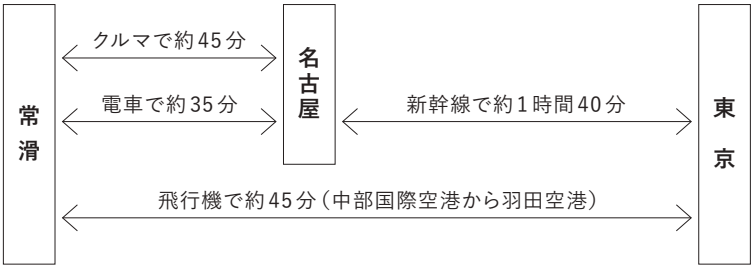


やきもの・海・空のまち、常滑

伊勢湾に面した人口約6万人の常滑市は、年間を通じて温暖で
漁業や農業を育み、多様な食に恵まれています。
常滑のやきものの起源は中世と古く、
窯業で栄えたまちを象徴する窯跡や煙突を
現在でもみることができます。
歴史を感じられる風景と、海上には中部国際空港が浮かび
まち独自の景観を生みだしています。
また、名古屋への交通網も整備されており
都市部へのアクセスも良好です。



交通アクセス



※中部国際空港からは国内の各空港、中国や東南アジアの直行便があります。

陶芸研究所

研修工房

とこなめ陶の森（資料館・陶芸研究所・研修工房の3施設の総称）は、やきもの文化の創造と発信の地として、陶業・陶芸の研究・研修の拠点として、また常滑焼の振興と伝承の地として一体的に常滑市が運営しています。

常滑市役所 経済部

とこなめ陶の森 陶芸研究所

お問い合わせ

所在地 〒479-0822 愛知県常滑市奥条7丁目22番地

TEL/FAX 0569-35-3970 **E-mail** tounomori@city.tokoname.lg.jp

開館時間 午前9時 ～ 午後5時 **休館日** 月曜日（祝日の場合は翌日）・年末年始

アクセス ●名鉄常滑駅からタクシーで約5分、徒歩約30分
●名鉄常滑駅から知多半田駅行きバス「INAXライブミュージアム前」下車、徒歩約10分

施設・研修見学は、いつでも受け付けています

お知らせ・最新情報

とこなめ陶の森
ホームページ

とこなめ陶の森

とこなめ陶の森

tokoname.tounomori

動画で見る
とこなめ陶の森
陶芸研究所
YouTube

日本遺産のまち
常滑市

〈事業主体〉 **常滑市** http://www.city.tokoname.aichi.jp/